ソドムの火

大原富枝

大原富枝

ソドムの火

大原富枝●ソドムの火

昭和49年7月10日 発行

定価 九八〇円

著者 大原富枝

発行者 藤山真人

発行所 株式会社 東邦出版社

東京都新宿区戸塚一ノ三五四

電話東京(二〇二)七六三一〜三

振替東京八五二七五

印刷・日大印刷 製本・美成社

大原富枝小説集■ソドムの火■目次

空白の海 5
東京湾十号地 37
寒鴨 63
たま祭り 89
三人の妻たち 115

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

まだ寒い春 137
鐘の鳴る都 173
海辺の墓 199
ソドムの火 229
あとがき 265

空白の海

寒い外の町からはいると狭い店の中は煙っているように湯気が立ちこめ、燗のついた酒のむせっぽい匂いと食べものの煮えかえる温気が冷えた頰を押し包んだ。

「あ、いらっしゃいまし、お二階へどうぞ」

郷里なまりまるだしのおかみが度の強い近眼鏡を光らせて、はまちゃん、はまちゃんと女の子を呼び立てた。

真直ぐに二階への通路を残して階下はぴっしりと身動きもならないほど混んでいる。

「あいかわらず御盛況だね——」

部長が先に立って階段の方へゆきながらいった。そのあとを男の同僚、朝子はそのつぎを歩いていた。まっすぐに同僚の背中を見ていた朝子の眼の隅に誰かが立上り、それと同時に、アッでもなく、オッでもないが、いや全然声にはならない気配だけが伝わってきた。

朝子はそっちを見た。なんのへんてつもないサラリーマン——ということはほんの少しの狡さと、敏捷さをまじえた、落着きとまじめさを湛えた男——が立ちあがっていた。

彼はしかし口はきかなかった。眼であいさつをしている。朝子に自分というものを思いだして貰うことに時間の必要なことを十分承知しているまなざしであった。そういう慎ましさでいて、しかもその眼にはどこか押しつけがましいといえばいえなくもない種類の翳りがある。――朝子は短かい通路を通りすぎてゆくほんの数秒のあいだにそれらのことを感じとっていた。

なぜか彼女はそのとき足を止めなかった。誰なのか思いだせなかったせいもある。その短かい通路は足を止めることを禁じられているような通路でもあった。彼女はあいまいな笑顔を彼の方に向けて目礼しながら靴を脱いだ。すがりつくような表情が一瞬男の眼の中に浮んだ。しかしすぐそれは消えて、男は腰を下した。うつむいた男の顔を、朝子は階段を上りながら見下した。そのとき突然、ある狼狽のような気持が彼女の心をよぎっていった。男の正体よりも、男が何者であるかがわかったときに初めて感じるはずの反応が先に訪れたのであることに、彼女は気づいていた。

それはじっさいおかしなことであった。正体が思いだせないのに、反応が先に起るというのは……声をあげて歓ぶべき相手でもなく、懐かしがる相手でも、また嫌悪するような相手でもなくて、ある奇妙な狼狽が湧いてくる相手というふうに彼女が感じたところを見ると、相手の正体はほとんど頭のなかに今一歩というところまで思い出されつつあったのにちがいない。

しかしじっさいに彼女がはっきり彼を思いだすことができたのは大分あとであった。

部長も同僚も全然気がついていないので、朝子は秘密に考えつづけていたが、彼等の話しか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ける言葉にも応答もしなければならない。大っぴらに、えーと、誰だったっけ、あれは……と声に出していうことができたなら、それはすらすらとあとをついて咽喉から吊り上げられてくるにちがいない、そう思うもどかしさであった。

記憶とそれの甦りという頭脳の作業について、こんな思いを味うことは誰しも経験のあることであったが、このとき朝子も、思いだしたとたんに、何かがするりとすり変ってしまったように感じた。ああ、あの男だ、そうだった、彼だったのだ、とはっきり摑むことができたとたんに、朝子はべつに何の狼狽も感じていないのである。ただうっすらとあいまいで皮肉な笑いが頬に浮んできて、彼女はそれを唇のあたりで嚙み殺した。

誰に対しての皮肉でもない、自分自身に対しての皮肉な笑いであった。いまとなっては、あのさっきの、まだ明確に記憶の復活していないときに、先に浮んできたあの狼狽を彼女はある懐しさで思い浮べた。そこにはいまのこの皮肉な笑みを浮べている自分よりももっと素直で心のやさしい、若い自分がいる、その自分が朝子は懐かしかった。

あの男が階下にいる。まだいる……そう思ったが敢えて下りてゆこうとは思わない。彼の方はどうなのだろう、自分がわかって貰えたと思っているだろうか、わかっての上で無視されたと考えているのだろうか。はっきりわからないまま上っていってしまったらしい、彼女はおれのこと、もう忘れてしまったらしいな、と思っているだろうか、それとも思いだして下りてくるにちがいない、と自信をもって待っているだろうか――

朝子はごく自然に振舞いたい、と考えた。人間は誰でも、自分自身をそのまま気に入ってい

る者はいやしない。どの部分か気に入らない自分をかかえて生きている。それが避けることのできないことなら、自然に行動したい、と考えるようになっていた。自然にということは決して思いつくままにということではない。あるべき自然の姿に近く在りたいということで、これはなかなか実行してゆくには勇気を要することであった。

――あのとき自分のしたことは自然だったと、いまも朝子は感じている。思うのではなくて感じている。それだから狼狽さえ懐かしいのだ、と思った。

今日はこの近くの支店との打合せが終ったあとで、ついでに夕飯をここで食おうか、ということなのであった。

あれ以来、一度も逢ったことがないことを思っても、彼が東京にいるとは思えない。仕事のことでできているのかしら……。彼という代名詞で考えていた。そして姓よりも名前の方を先に思いだした。敬虔の虔だ、そうだ、あのときそう憶えたものだ、敬虔の虔だと……。するとそれにつれて姓が木崎であったこともつるっと引きずりだすように思いだした。

小さい四角の土焼きのコンロに真赤におこった炭火が入れられて運びこまれ、美しい緑色の春菊などの野菜がみずみずしくなまめかしくもある長葱とともにざっくりと切られて笊にのってくる。

「しかし、あの娘は可哀相だなア……」

部長が思いだしたようにいった。今日ここで夕飯を食おうか、ということになった一つの意味には人事課長の朝子への慰労の意味があった。彼女はこの一週間ほどのあいだ、社員の一人

の娘のことで東奔西走とまではゆかないが大分駈け廻って骨を折っていた。
その娘は今日ようやくある病院へ入院させたが、それまでは朝子は彼女を自分の家にあずかって面倒見ていた。その娘は僅かばかり神経がおかしくなっていた。ごく軽いことだし快くなることもわかっていたがいまは暫く静養させる必要があった。
「あんまり淋しい不幸の中で育つと、人間は幸福になるとかえって不安になるものらしいですね」
朝子は白葱や春菊をさくさくと鍋の中に入れながらあっさりといった。幸福にも不幸にも大して動じなくなっている淡白さは、一面では男を男とも思わなくなっているふてぶてしさとして、彼女自身意識されている。
人事課長という職場を摑むところまで勤め抜いてきたあいだには、男というもの、女というものを、ほとんどすべての角度から眺め抜いてきたといってもいい。職場における男の競争心の激しさ、日本の男たちの中に残滓としてまだ共通して在る女の人格を認めたくない意識、こと職場での能力の上においてならば、いかなる事情にあるときも女に対しては一致結束して敵対する男性の本能もいやになるほど味わされてきている。男の能力についての敬意も、男の本能的闘争心、意地悪さ、ナンセンスなほどの負けぎらいに対するおかしさも十分知っている。なんといっても男性本位に組織されている社会で女が頭角を抜いてゆくのは、本人の能力は勿論だが、男性同志の勢力のバランスの裂目においてであることも朝子は知っている。そのことを利用することはあっても、こだわったりするほどもはや女ではなかった。

少し気がおかしくなった孤児で、独身の叔母に育てられたという娘に縁談が持ちこまれるたびに、叔母は半狂乱になって娘の髪の毛を摑んで引きずり廻したり、殴ったりして暴れる。彼女を好きになった青年たちは皆恐れをなして遠去かった。盗ッ人猫のなんのとののしられても彼女をその腕に受け止めようというほどの青年は現れなかった。
「お父さんやお母さんの亡くなったあとお前を育てるためにわたしは一人でやってきた、今度はお前が一人でわたしを見てくれる番だ」
というのが叔母のヒステリーの症状であり、病理であった。叔母は彼女の生涯の忍従をいま姪の上に復讐しようとしていた。しかもそれは限りない姪への愛だと誤認されている。復讐ではなく愛の奉仕として表現されるために、一層残酷になった。叔母は自分の奉仕の対象が結婚によって失われることを極度に恐れ、警戒しているのだった。
彼女はもうほとんど結婚を諦めかけていたが、しかし諦めきってはいなかった。いつか、すべてを知った上で自らを受けとめてくれる男性が現れるにちがいないと、それこそ大海で一粒の真珠を探すように信じて待っていた。
それは他人には空しい努力にしか映らないものであったが、しかしそうではなかったのである。彼女の期待した通りの青年が現れて彼女を愛した。人生はまさに賞むべきかなである。しかも青年は優れた人で心のやさしい男であった。彼女は家出して青年と結婚した。狂気のように追いかけてくる叔母に匿れ家が発見されるたびにアパートを転々として二人は匿れて生きている。しかし彼女は頭を傷めてしまった。医者は、恐怖症ですねと簡単にいった。叔母がま

た現れはしないか、今日帰ると叔母がアパートの前に立っているのじゃアないか、という恐怖が重なっていって脅迫観念になったのだ、という。しかし彼女自身は、
「あんまり仕合せで、こんなに仕合せでいいものかしら、と不安でたまらないんです」
というのだった。不幸に強い女は大概幸福には弱いのである。自分の課の娘だからというのは勿論だが、朝子が出来るだけの骨を折ったのはこの青年の存在に彼女が、人生は賞むべきかな、という思いをさせられた、その愉しい思いからであった。全く人生絶望には価しないものである。自分の人生には現れることのなかった男の出現を祝いたい。祝福に終らせたいからである。しかし部長や同僚にはそこまでは話さない。女が社会的地位を持つ場合、いかにささやかなものにしろ、それはいつも意識して行動しなくてはならない、という不幸な現実がまだ日本の社会にはある。感傷と職務のあいだにはいつも一定の距離が必要であった。
「磁器のような女」と部下や同僚にいわれていることも朝子は知っている。「冷たい女」を少々美化したものにすぎない。「割れにくい女」という意味に、男たちがどんな猥雑な意味を含めているかも知っている。
　建売住宅のこぢんまりした小さい家に、秋田の血のまじった雑種の犬とともに朝子は暮していた。丈夫な金網で囲った家の周りの狭い庭で彼は留守番をして主人の帰るのを待っていた。そこには彼女の生活の秩序があって、それはほとんど誰にも犯されることなしに保たれている。彼女はもう自分の生活に偶然と、それによる変動を期待せぬばかりでなく、むしろ拒絶していた。

若い日に誰もが眼覚めるとともに喚び起す、今日は何か思いもかけないことが起らないかしら、という漠然とした期待がもうなくなっている。何か起れば、それはもうろくでもないことに決っている、といった経験の堆積がある。

神経をいためた娘を、あのピチッと決った彼女の生活の秩序を乱してまで匿まい面倒を見たことは、彼女が自分から意志してやったことである。

しかし、と彼女は思う。いまこの店の階下で多分ビールを飲んで料理をつっついているであろうあの男、彼はちがう。これは偶然であった。彼女の拒否している偶然の出会いであった。

土曜日の夜というのは街の空気がちがう。東京中のサラリーマンたちの吐く、そこはかとなく楽しい期待の吐息が流れている。

一夜あけてしまえば、明日の朝になってしまえば、もうシャボン玉のようにペシャンコに潰れて、しぼんでいるはかない希望めいたものにしろ、今宵はまだ生れたばかりの新鮮さで街を覆うているのだ。誰もがなにかしらん、いいことがありそうな気がしている。すばらしいことが起りそうな期待を持っている。

そういう土曜の夜のムードは殊にこのような実直な小料理屋の店の中に一層濃厚であった。そして朝子とてそれが嫌いではない。ただし彼女にとってそれははかない希望ではなく確実な安息、心暢びやかな休息の契約であった。

階下の男の突然の出現、いや出現などと呼ぶものではない、偶然の出会いを秘かに彼女が憎

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com